

# バーミヤーン谷における 考古調査

— 2007年度 —

## 1 はじめに

2001年3月のタリバーンによる破壊によって、大仏や壁画をはじめとするバーミヤーン谷の文化遺産は甚大な被害をこうむった。ユネスコは2003年にバーミヤーンを危機遺産に登録し、国際社会に遺跡保護への緊急支援を呼びかけた。それをうけて奈良文化財研究所と東京文化財研究所は、2003年度よりアフガニスタン文化青年省考古学研究所と共同でバーミヤーンにおいて文化遺産保護のための調査や研修などの国際協力事業を展開してきた。2007年度には、当初6・7月および9・10月に二次のミッションを派遣する予定であったが、現地の治安情勢の悪化により、二回目を中止せざるを得なかった。本報告では、6・7月に実施した第8次ミッションのうち考古学関係の内容について述べる。

## 2 ガリーブ・アーバード地区の発掘調査

ガリーブ・アーバード地区は西大仏の南西300mほどの距離に位置する。玄奘の『大唐西域記』に「王城の東北の山のくまに立仏の石像（西大仏）がある」との記述があることから、ガリーブ・アーバード地区は当時（西暦629年）の王城が立地した場所に当たる可能性が高い（図34）。しかし、現地表面上にその痕跡を認めることはできない。この地区は将来の開発による破壊にさらされる可能性が高いので、試掘調査をおこない、その埋蔵文化財を事前に確認する必要がある。これまでの調査で7箇所

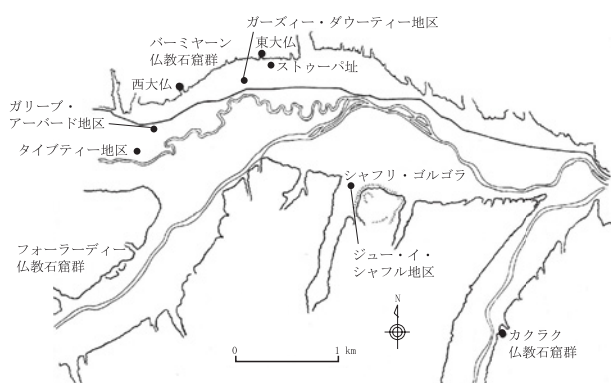


図34 バーミヤーン谷の主要遺跡分布図



図35 ガリーブ・アーバード地区GA9調査区で検出された土壁遺構（北から）

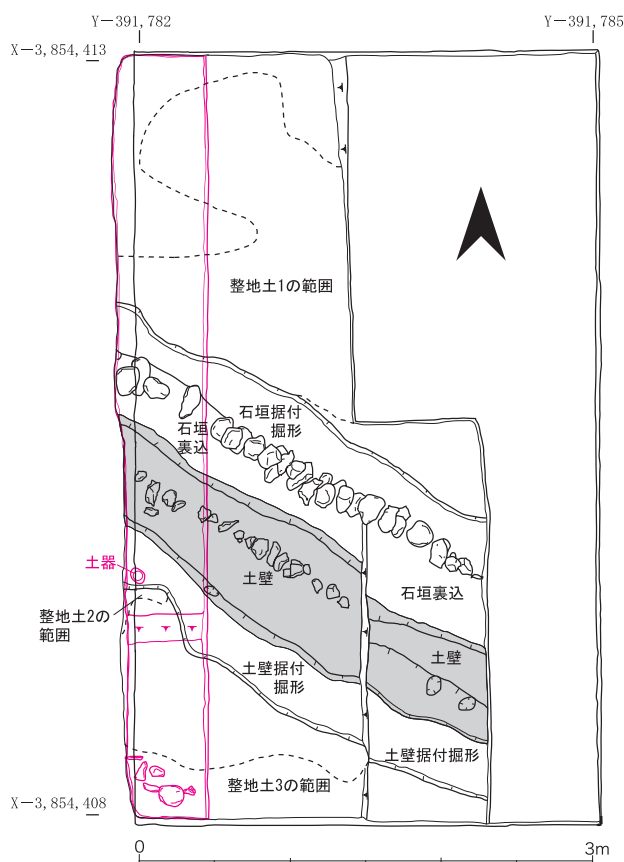


図36 ガリーブ・アーバード地区GA9調査区平面図 1:50

の試掘坑を発掘し、側溝をもつ道路遺構、幅10mほどの溝状遺構などが検出された。

第8次ミッションでは3箇所の試掘坑を発掘し、このうちのひとつ（GA9）で、地表下およそ3mのところから土壁の遺構が検出された（図35、36）。土壁は幅1m、高さ50cmほどの基部のみが残っており、上部は削平され失われていたが、基部の幅から高さ5m以上の規模と想定される。壁の片側は自然石による石垣で外装されている。これはおそらく壁の基部のみを外装したもので、中央アジア地域の土壁建物に一般的な構造である。また、土壁の芯部には補強材として自然石が埋め込まれてい

た。サブトレンチを掘削し断面確認をしたところ、下層にも先行する土壁の痕跡がみつき、数次にわたる建て替えがおこなわれたことがわかった。

玄奘が記述した「王城」が立地するとされる地点で、建造物の明確な遺構が発見されたのは今回が初めてである。そのためこれが「王城」と関連する遺構である可能性が高い。出土した土器は仏教時代からイスラーム時代への移行期（8～9世紀頃）に位置づけられる。玄奘が訪れた7世紀より年代的に新しいが、その後も継続して営まれた「王城」に関連する遺構であるとも考えられる。

### 3 カクラク谷の遺跡踏査

カクラク谷は、バーミヤーン谷の東南に位置する支谷で、カクラク仏教石窟群があり、その中にはかつて高さ6.7mのカクラク大仏があったが、これもタリバーンによって完全に破壊された。仏教石窟群より谷奥の地区はこれまでほとんど調査されておらず、第8次ミッションで初めて本格的な遺跡踏査が実施された。

カクラク仏教石窟群の北側にある潤れ谷ではダハネ・ナウと呼ばれる古墓地が確認され、人骨の散布も確認された。聞き取りによると、かつて崖面からの土採りの際、土器の中に納められた人骨が出土したという。このような埋葬法はイスラームのものではない。もし、土器が箱形のオッサリと呼ばれるものであったなら、ゾロアスター教徒の墓であったのかもしれない。

仏教石窟群から谷を南にさかのぼると、いくつかのボルジ（望楼）、石窟群、自然洞が点在する。ボルジの多くは尾根上に立地するが、多くの場合、地雷除去が完了していないところがあるので、足を踏み入れて調査することはできなかった。石窟の多くはカマボコ形の天井構造を持ち、イスラーム時代（9世紀以降）に庶民の住居として作られたものであると考えられる。

さらに谷を6～9km遡ると、ドゥカーニー村を中心とした平野部が開け、そこでは4箇所のカラ（城）をはじめ、いくつかの古墓、石窟群、ジアラット（巡礼地）を確認した。カラとは、一辺20～30m四方の範囲を土壁もしくは日干し煉瓦の壁で囲み、その四隅に平面円形もしくは多角形の塔を配する建築で、19世紀頃に建てられた領主の城・屋敷である。これらのカラは、村人の証言によると、4兄弟の領主によってそれぞれ建てられたものだ



図37 カクラク谷中流部のカラ（カラエ・チョクラク）

という（図37）。また、ここにあるソメ・マザールと呼ばれる石窟群は、カクラク谷で確認された石窟の分布の南限である。現在は石窟の前に住居が建て増され、その確認がむずかしい。また、村人の証言によると崩れて入口が塞がれた石窟も数多くあるという。

なお谷を遡ると、いったん谷幅が狭くなった後、1kmほどでタイリヤーと呼ばれる上流部に至り、谷は南西・南・南東方向に分岐する。ここではボルジ、古墓地、ジアラットが確認された。ボルジはボルジェ・カーファリー（「異教徒の塔」の意）と呼ばれ、上流部の入口部の西の尾根上に、片岩を積んだ基底部のみが残っている。その呼び名から、古い時代にさかのぼる可能性を想起させる。

### 4 まとめ

今回の調査では、ガリーブ・アーバード地区で仏教時代の「王城」に関連する可能性が高い遺構がみつかったこと、またカクラク谷で初めて遺跡踏査を実施したことが重要な成果である。調査にあたっては、日本人専門家とアフガニスタン人専門家が協力しておこない、日本側からは調査方法に関する技術移転に貢献したのみならず、アフガニスタン側も踏査における現地住民からの聞き取りなどにおいて重要な貢献を果たし、相互協力の下で良い成果をあげることができた。現在、現地の情勢は予断を許さないが、一日も早く状況が改善し、事業が再開できることを期待している。（石村 智・森本 晋）